

2012～2013年度 釧路北ロータリークラブスローガン【奉仕の輪を広げ 奉仕の理念で地域に活性を】

10月24日(水) 本年度第16回(通算2655回)18時30分～ 釧路プリンスホテル
『職業奉仕講演会』 担当/プログラム委員会

☆お客様と来訪ロータリアン

・藤川享胤様 (R I 2800地区PDG・鶴岡RC)
・長江 勉君 (第7分区ガバナー補佐) ・工藤ゆかり君 (ガバナー補佐幹事)
・邵 龍珍君、宮原邦彰君、田中正己君、樋口貴広君、土橋賢一君 (釧路RC)
・坂口裕二君、三木克敏君、中村幹男君、大美栄次君 (釧路西RC)
・長井一広君、山本美穂さん、長倉巨樹彦君、上川原 昭君 (釧路南RC)
・沢田雅仁君、池田圭樹君、渡部哲夫君 (釧路ベイRC)
・畠山優那君、中村理恵子君 (釧路北RAC)

☆出席報告【会員総数62名 免除7名 出席計算に用いた会員数62名】

本日の出席者 30名 48.4%

☆ニコニコ献金

- ・高橋 貢君 ～ 藤川先生よろこそ釧路北RCにお越しいただきました。
 - ・小林裕幸君 ～ 本日もよろしくお願いたします。
 - ・萩原昭博君 ～ 藤川先生、本日のご講演よろしくお願いたします。
 - ・小野寺英夫君 ～ 藤川先生ありがとうございます。
 - ・石井東洋彦君 ～ 藤川先生、お待ちしております。
 - ・坂入信行君 ～ 藤川先生、釧路北RCによろこそ！
 - ・足立功一君 ～ 藤川先生、ご来釧ありがとうございます。
 - ・能登信孝君 ～ 藤川先生、本日はありがとうございます。
 - ・布目九一君 ～ 21年目の入会記念日です。
- ※ (長江ガバナー補佐より志をいただきました)

☆幹事報告☆
《小林幹事》



- ①白糠ロータリークラブより8月・9月の月報が届いております。
- ②釧路北ローターアクトクラブよりチャリティーボーリング大会の案内が届いております。
日時は11月3日土曜日19:00～場所はパレスボウルとなっております、本日回覧いたしておりますので参加されます方はご記入の方よろしくお願いたします。
- ③本例会終了後、直らいをおこないます、事前に出欠の確認をしておりますが、出席で出された北ロータリークラブのメンバーの皆様はMTヒルズ3階の方へすみやかに移動をお願いいたします。
- ④長江ガバナー補佐より志をいただきました。

会長挨拶

《高橋会長》



皆様、今晚は！前回は兄の四十九日の法要で欠席させて頂きました。先ほど出張から帰りまして、この挨拶をおおぞら5号の中で考えてきました。札幌はやはり、日本を代表する都市で、200万近い政令都市でもあります。しかし、釧路も素晴らしい資源と観光の街であります。故郷は遠くにありて想うものを感じてまいりました。

今月は職業奉仕月間です。本日は大変お忙しい中、はるばる遠方より藤川先生をお迎えしております。この場をお借りしまして、お礼申し上げます。藤川先生は長年RI会長代理としてご活躍されておりましたので、豊富な経験とロータリー倫理、奉仕の心を実践されております。私も本日の講和を楽しみにしておりました。

職業奉仕に関する事柄の一つ。昨年10月に亡くなったアップルの創業者、スティーブジョブスの言葉に、「偉大な大工は見えなくてもキャビネットの後ろにちっちゃな木材を使ったりしない」と名言を残しています。このように本質を重視する精神は、曹洞宗・道元の教えに通じるところがあるといわれ、実際、ジョブスと禅には深い結びつきがあり、彼は青年時代から禅と接し、曹洞宗の乙川弘文（おとかわこうぶん）老師に師事していたと言われております。私はこれが今必要な職業奉仕倫理そのものと受け止めました。

本日は、般若寺の代表役員であります、藤川先生にお越しいただきましたので、曹洞宗、禅のお話をさせて頂きました。以上、会長挨拶とさせていただきます。



職業奉仕講演会

藤川 亨胤様

(RI2800地区PDG・鶴岡RC)



1997年13万人まで増強されましたこの国のロータリアンは今年度9万人を割ってしまったのは皆様すでにご承知の通りであります。

4年前足立先生の地区大会のときRIの現況報告の中で会員増強について私がコメントしたことを覚えていらっしゃるでしょうか？

私は次のようにお話申し上げたのです。

ロータリーが上意下達的に会員増強の大キャンペーンを張ったのはこれまでに大きく分けて2回御座いました。1990年前後、会員数が100万人前後に達したときと、2005年ロータリー100周年をむかえる直前、会員数150万人をターゲットに掲げたときでありました。しかしながら、いずれも失敗に終わりました。

しかしRIの官僚はこの失敗に懲りず、すすきあらばあらたにこのキャンペーンをするであります。と筋書き通り今年度の理事会でRIは2015年まで会員130万人にまで復活させようというアドバルーンを上げました。

田中作治RI会長年度の今年が初年の年であります。この国は田中さんのお膝元でありますから1万人の会員増強を要請が下りました。

しかもその作戦名はサクセス・ジャパンのサクとジャパンのジをもじってサクジ作戦と名づけられたと聞いて驚く以上にあいた口がふさがりませんでした。

これを今年度の理事、現、前RI会員増強在日委員、3人のRCの連名で日本の34地区のガバナーに通達されました。

もしこのような愚かな作戦で1万人の会員増強が達成されたら私は静かにこの組織から離れようかとも思っております。

上からの指令で本物の会員増強など出来るはずがない、これは私の相変わらぬ信念であります。会員選考委員会が機能していないクラブにだれがステータスを感じるででしょうか。

魅力ない昼食クラブにだれがプライドを持って入会などするででしょうか？

ロータリーはお楽しみクラブや仲良しクラブだけであろうはずがございません。

それだけだったら地域の良質といわれる専門職務者や職業人が高い会費を払ってまでクラブに残る必要がどこにあるででしょうか。

会員増強のキーワード、それは皆様が皆様のクラブにどれだけ誇りをもっておられますかであり、皆様がクラブの仲間になんだけ深い友情と信頼を感じているか、煎じ詰めればこの2点ではなかろうかと思っております。

会員増強は躍起になってするものではなく充実したクラブ運営をすれば自然とついてくるものではなかろうかと思っております。その視点に立てばこのクラブは素晴らしいクラブであります。なぜなら今時毎年このような職業奉仕のセミナーをしておるクラブはそう多くないからであります。

私が恥を忍んで本日来させていただいたのも足立先生から頼まれたということもありましたがこのクラブに魅力を感じているからであります。

実は足立先生の地区大会で私は現在のロータリーを危惧する発言をいたしました。

給料をもらいながらもけしてロータリーを愛しているとは思えないエバンストンの職員に母屋を取られて振り回されているシニアリーダーをうれいたからであります。

それを聞いておられたこの地区のリーダーのお一人が藤川さんはロータリーでの出世を諦めたなど発言なさったそうではありますが、はなから出世などする気持ちなど毛頭ございませんので今日も思うがままにお話させていただいております。

下げ止まりの見えない会員減少の理由はいろいろあるかと思えます。

会費の問題、女性会員の問題、枠にはめられた組織に入ることに消極的な若者の感性の問題、Eクラブの問題など多様でありましょうが、私が思うロータリアンの底の見えない減少の最大の理由、それは現在のロータリーに権力に阿ねず、わが身を律し他のロータリアンの模範になるべくロータリーの真のリーダーの欠如、それが大きな理由ではなかろうかと思っております。

ロータリーよどこに行く、そういわれ始めてかなりの月日が流れましたが、ロータリーのシニアリーダーといわれておられるお方たちはこの先ロータリーをいったいどの方向に導こうとしているのでしょうか。

組織が衰退の一途をたどり始めたとき原点に戻れ、は通説でありますますがさすればロータリーの原点に戻れとは果たしてどこに戻ればいいのか。

皆様はどこに戻れば良いとお思いですか？

どうぞご遠慮なく！！ロータリーは多様性を認めますからこれだけが正解という答えはないと思っております。

1906年1月シカゴロータリークラブの定款が制定されました。

2条からなるこの定款は下世話な言葉で表現するならば1条は仲間で商売をうまくやってお互いお金持ちになりましょうであり2条は仲間で女房抜きで楽しもうではありませんかだったと思えます。つまり互惠取引と親睦が主体でありました。

だからこそシカゴRCのパンフレットに・会員相互の取引の義務・原価取引の原則・統計委員への取り引き報告の義務が載せられたのは当然でありました。ところがご承知の通り同年4月ドナルド・カーターの入会騒動が起きました。「会員以外の人に何か利益になることをするクラブには将来性があるがこのクラブにはまったくそれが無い」そう言って入会を拒否したあの騒動であります。

そこでポール・ハリスも自分たちだけ得をするクラブからの脱却を決意し、ハリー・ラグラス等有力なメンバーの反対を押し切って12月に定款を変更し第3条としてシカゴ市民の最大の利益を推進し、シカゴ市民としての誇りと忠誠心を市民の間に広めること、これを追加したのであります。

これがロータリーの社会奉仕の原点であり奉仕という概念の母体であるといわれておりますが本日は職業奉仕のセミナーですから私はここに帰ろうとは思いません。

私が戻るとするならば1927年ベルギーのオステンで開催されました国際大会で4大奉仕が始めて分割され「職業奉仕」という呼称が正式に与えられ、「職業奉仕はロータリアンがそれぞれの職業を通じて他の人々に奉仕し、かつ高い道徳的水準を保つことを奨励します。」ここに帰りたと思います。

なぜならこれこそロータリーの職業奉仕の理念として受け入れ、今日までロータリーの一部で受け継がれているアーサー・シェルドンが提唱した奉仕理論そのものだからであります。

あえて一部と申し上げました。それは現在のRIの進んでいる方向を見ているとわれわれの金看板職業奉仕はどんどんどんどん軽んじられる傾向があるからです。

私から改めて申すまでもなく深川先生からすでにお聞き及びの事と存じますが、シェルドンが提唱した奉仕理念とは職業人の目標として「自らの事業を継続的に発展させること」そのためには必要と思われる経営学、販売学、人間関係学などを学び自らの利益を優先せず自分の職業を通じて地域社会の人々に奉仕をすれば必ず成功する」まさにHe profits most who serves bestでありました。それはまさに近江商人の、「売り手よし、買い手よし、三方よし」の精神であります。

しかもシェルドンは奉仕の理念を説いただけでなく理念の実践を促したのであります。

つまり顧客の満足度を最優先して、自らの職業を通じて他人に奉仕すればだまってもリピーターと新規顧客を獲得でき継続的な事業の発展に繋がるのである。これがシェルドンの奉仕理念の根幹であろうと思います。

ロータリー倫理訓の第6条、「同業者と同等ないしそれに優る完全なサービスを尽くすように企業経営を行うべきこと。又もしそれが完全なサービスか否かに疑念が生じた場合には、当該債務上妥当な範囲を超えてまでもサービスを行うべきこと」というこのくだりはシェルドンが言うリピーター確保のお手本にすべきではなかろうかと思っております。この条項はまさに例え損をしても必要ならばアフターケアなどのサービスには徹するべきだというのであります。損して得とれ。得とはお金で買えない信用であります。それはそのまま「He profits most who serves best」に繋がる道であろうかと思えます。

私は又こうも考えるのです。職業とは金儲けの手段であります。どんなにかっこをつけても私達が生きる糧を得るための手段であることに間違いはないはずであります。

一方奉仕とは世のため人のために何かをさせていただきますという思いやり、無償の愛の世界であります。この方向性がまったく違うベクトル、打算の世界と愛の世界を調和させるのがロータリーの職業奉仕であろうと思います。調和に必要な絶対条件として浮かび上がってくるのが倫理の追求であります。なぜなら金儲けのために仕事ありきではなく、自分の仕事が世のため人のためになってほしいという信念と情熱が経営理念の根底になければ、自分の職業にプライドはもてないばかりか、第一その実業は一時栄え、儲けたとしても長続きはしない、これはシェルドンの理念に相反するのであります。勿論シェルドンが言ったようにはじめから倫理の追求ありきではありません。ただロータリーの職業奉仕を実践すればするほど当然として倫理の追及、体得はついてこずにはいられないと考えます。その視点から考察すればVocation, 天職とは天が私に授けた仕事と受け止めるよりも天に対して私が偽りのない欺瞞のない仕事に徹しているかどうか、目先の欲に目がくらんで恥ずべき行為をしていないかどうか、商売の王道から外れていないかどうか常に自分を厳しく律する目を保ち続けることに他ならないと私は受け止めておるのであります。

職業奉仕論の観点から考察するならば経営者は会社の一番の財産である社員とその家族をこよなく愛し、彼らの生活を守るために企業が得た利益は応分に彼らに分け与え、しかも会社を陰に陽に支えてくれる取引業者とは常に公平ではなく公正なる取引が出来ているかどうか、少なくとも賄賂やペイバックを要求するような体質が職場にないかどうか厳しく律する眼を持ち、最終的には顧客のニーズにしっかり応え、あくまでも自分達の職業が社会や消費者のために本当に誤魔化しのない、上質なものが提供されているかどうか、その信念が経営の原点にしっかりと据えられ、しかもぶれずに実践されているかどうか、この追及がロータリーの職業奉仕のキーワードであろうかと思えます。

少なくともロータリーの世界での経営方針の根幹は株主の利益確保のために心血を注ぐことではないことだけはしっかりと肝に銘じて欲しいと思います。綺麗ごとはいくらでも述べられますがその行動に純粋性といざという時の真摯なる反省の心が欠けている、それが今日のロータリーの職業奉仕の実態であり、ロータリーが社会からしっかりと認知を得られないでいる理由であり、多くの会員が簡単にロータリーから離れていく所以ではなかろうかと思えます。ロータリアンが行う奉仕の中でロータリアン自身が直接受益者になりうるのは職業奉仕だけであります。

誤魔化しのない仕事をすることこそロータリアンが提供する職業奉仕は信用が出来るという正当なる評価と認知を社会から受けておいた時代がございました。

その信頼を今一度取り戻すこと、それは今ロータリアンに突きつけられた最大の責務であろうかと思えます。

ではどうしたらその信頼を取り戻すことが出来るでございましょうか？

私が座右の銘といたしております金言に「随処に主となる」という臨済宗の開祖であられます臨済義玄禅師のお言葉がございませぬ。何時、如何なる場合においても何者にも何事にも束縛されない、ぶれ

ない己の信念を持って力の限り生きていくなればけっして真実を見誤ることはないであろう、義玄はそう言って修行者たちを諭したのです。

礼節を重んじ、仁と義を守るためには命を懸けることすらいとわない生き方であった武士道に相通ずるものであろうかと思えます。

ところがこの「随処に主となる」という気概と信念をお持ちのロータリアンが残念ながらあまりにも少なく思えてならないのであります。

松尾芭蕉門下十哲の一人に向井去来という方がおられますが彼はその著書「去来抄」の冒頭に師匠であられた芭蕉の不易流行という言葉が引用されました。

去来の師であられた芭蕉は弟子達にこう教えたのです。

私の俳諧の流儀には「千歳不易の句」つまり過去、現在、未来とも時代を超越して通用する句と「一時流行の句」即ちその時代、時代の風潮にかなった新鮮味を重視する句と二種類がある。流行と言う時代の流れに敏感でなければ、その時代に生きる人々に受け入れられる生命力を持たないということになります。そのことを余りにも追い求めすぎると不易と言う一番大事な基本的、根本的な精神が崩壊してしまう恐れがあることを強調したのです。

つまりこの世には絶対に変わってはならないものと変わっていいもの、いやむしろ変わらなければならぬものがあることを心するよう力説した言葉がこの不易流行であります。

数年前、この国で品格という言葉がブームになったのは記憶に新しいことでございます。この国の、そして我々国民の品格が問われた多くの著書が出版されました。

ブームでありましたから、芭蕉の言葉を借りるとすればこれは一時流行であります。私はこの品格の追求こそロータリアンは不易に追い求めなければならない「随処に主となる」ための大事な命題であると同時にこれこそロータリーの看板職業奉仕の復活に繋がるものであろうと思っております。

今年の11月私はこの品格について対照的な二つの出来事を経験いたしました。

その一つはブータンのワンチュク国王夫妻の新婚旅行を兼ねた来日でありました。

短い期間でありましたが在日中に若い国王夫妻が示された気品、謙虚さ、思いやり、さりげない心配りは実に見事ございました。お二人の立ち振る舞いと素敵なお笑顔に私たちはどれだけ心を和ませていただいたことでしょうか。それと同時に人間にとって本当は何が一番大切で幸せなのかを暗黙のうちに教えていただいたような気がいたします。

それに対してその国王夫妻を歓迎する宮中晩餐会を欠席した4人の閣僚の品格のなさは実は彼らだけの問題だけにとどまらず、今のこの国の品格のなさを物語っているような気がしてならないのです。欠席した理由はそれぞれ皆さんがあれこれ言い訳をなさっておられましたから今更問い詰めようなどは毛頭考えておりませんが、どうしても私が腑に落ちないのはあの閣僚の皆様はアメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランス、ドイツなど俗に言う大国からみえられた国賓に対しても同じ態度をとっていたであらうでしょうか？という疑念であります。

彼らが同じ行為をしたと仮定しましょう、ブータン国はなさいませんが、これらの大国の大使館から彼らの行為に対して猛烈な抗議を受けたとき彼らの首はあの時繋がっていたであらうでしょうか。あのレベルの政治家が現在の政治の舞台では「随処に主」であるはずべきのこの国の政治のリーダーといわれている人たちなのです。

ただ私どもも心しなければならぬことは福沢諭吉翁が言われたその国の政治家のレベルは実はその国の国民の文明のレベルに比例するという戒めでありましょう。

もう一つのそれはプロ野球読売ジャイアンツのドタバタ劇でありました。

所詮権力争いですから双方に言い分はあろうかとは思いますが、葉巻やパイプをくわえながらホテルのロビーを闊歩し、少なくとも公衆の面前では己が権力を誇示せんがためでしょうか謙虚さのかけらなど微塵も感じることの出来ない振る舞いをなさるあのお方がこの国のマスコミのドンであり政治の世界では自他共に認めるフィクサーであることに幻滅と恥じらいと嫌悪感を感じるのは私だけであらうでしょうか。

たとえ法廷闘争に勝ったとしてもそれが彼の品格を上げるとはけっして思えないのです。

しかもそれらの行為に対して寄らば大樹の陰を決め込み、厳しいコメントすら出せないでいる、本来ならばこの国の良識の府となるべきマスメディアの自負心はいったいどこに消えたのでありましょうか。

「随処に主となる」気概の喪失でありどっかのテレビ番組流に言えば双方に喝であります。

経営者や専門職務者にどれだけ品があるか、備わっているかこれは職業奉仕の大きな要であらうと思えます。Boys be ambitious!! 少年よ大志を抱け!!

ウィリアム・スミス・クラーク博士の有名なこの言葉を知らないお方はほとんどいないはずであります。しかしながら次につながるクラーク博士が最も言いたかった戒めを知っておられるお方は実はそんなに多くはないのであります。Boys be ambitious その大志とはお金にはない。利己の野望にで

もない。ましてや人呼んで名声という空虚な志のためではない。人は如何にあるべきか、人は如何に生きるべきか、その道をまっとうせんとするその志を高こうせん。

このボーイズをロータリアンズに変えてみましょう。

ロータリアンよ大志を抱け。その大志とはお金のためではない、利己的野望のためでもない。ましてや人呼んで名声と言う空虚な志のためであろうはずがない。ロータリアンとしてどうあるべきか、ロータリアンとしてどう生きるべきかその道を全うせんとするその志を高こうせん。

ロータリアンとしてどうあるべきか？ロータリアンとしてどう生きるべきかは、そのまま職業人として専門職務者どうあるべきか、どう生きるべきか、私どもの金看板ロータリーの原点である職業奉仕そのものに繋がる道だと確信いたします。

ロータリーで言う職業奉仕で心すべき点は、他の同業者の皆様よりどれだけ多くの付加価値をつけて消費者のために、お客のために、私の世界で申せば信者のためにそして社会のために自分の生業を提供できるかであります。

今は亡き私の敬愛した大先輩のロータリアンのお医者様がよくこんなことを言われておられました。藤川さん、病気を治すには三つの力が必要なんです。三分の一が病気を直したいという患者の強い意思力、三分の一がその人が持っている自然治癒力、そして残りの三分の一が医者の方の技術ってところでしょうか。ところが最近の若い医者にはこの大事どころがわからないやつが多くなって困ったものです。たいした実績や技術もないくせに病気を治してやっているのはこの俺なんだという錯覚と自己顕示力だけは人並み以上。

この傲慢さがなくならない限り、世間を騒がしている考えられない誤診や仮に病は治せても肝心な病人を治せない言葉遣い一つも知らない頭でっちな愚かな医者がこれからもどんどん増えていくんだらうと寂しそうな顔をなされたのを今でも鮮明に覚えておるのです。

今から37年前、私がまだロータリアンになる前の昭和51年5月号のロータリーの友に当時四国全県367地区、現2670地区、三宅徳三郎ガバナーの鏡の前のロータリアンというこんな記事が掲載されておりました。

1936年イタリア国立連合病院のエリンコ・ジュッポーニ博士が、「鏡の前の外科医」という一種の「思いでの記」とも言うべき名著を発刊した。

どこの病院でも手術室に入る前に消毒室がある。その消毒室の壁には大きな鏡が取り付けられている。医師は手術室に入る前ここで手洗いをし、手の消毒をするのである。鏡の前に立った外科医は、敏速に正確に消毒をしながら鏡の中に写し出された自分の目に問いかけるのである。今から行わんとする手術は人道に反してはいないか、良心におとらないか、おのれの全能力を発揮できるか、それを確かめて後、静かに手術室に入る。

手術が終わり最後の縫合が行われると元の消毒室に戻り、手術衣と手袋を脱ぎマスクをはずしてからまた鏡の前に立つ。なぜ鏡の前にたつのであろうか？勿論身だしなみを整えるためなどであらうはずがない。

この動作は長年に亘って習慣づけられ教えられてきたものである。すなわち外科医は、今自分が行ってきた手術の批判を鏡の中の自分の目に見るのである。鏡の中の目から、手術は正しく行われたか、全力を発揮できたか、すべて良心的に行われたかと反省するのである。エリンコ・ジュッポーニはここで次の言葉を書き加えている。「鏡は一瞬間にすべてをあらわす。鏡は冷たく、隠蔽することを知らない」と。

私は外科医として鏡の前のそれでありたいと同様、鏡の前のロータリアンでありたいと念願してすでに30有余年、自分独りの理想として誰にも話さず胸に収めてきたのだが、13年前地区ガバナーとなり、今回2度目のお勤めをするにあたって、今度の巡礼も含めて機会あるごとに同士に語ったのは、一人でも多くの「鏡の前のロータリアン」の出現を祈念して止まないからである。

4年前、お寺のお檀家さんで私が心からお慕いしていた一人の女性が静かにその生涯を閉じられました。清水 博子さん87歳。清水さんのご主人は60年前、戦争で受けた怪我が原因で亡くなりました。お二人の間に出来たお子さんは男3人・女2人の計5人。10歳を先頭に1番下は当時8ヶ月の乳飲み子が残されました。

今から約60年前、昭和26・7年鶴岡で女手一つで5人の子供を育てることは並大抵の苦勞などという言葉が安易につかえないほどどんなにか厳しく辛いものであったかと思えます。

この子達を連れて何度主人のところまゐろうと思ったことでしょうか。でも出来ませんでした。何よりも主人が許してくれないと思えました。今思えば、方丈様、頑張っただけで本当によかったと思っております。不思議なものです、辛かったことなどあんまり思い出せないのです。私の口から申せば親ばかりになりますが5人の子供たちも夫々思った以上に立派に育ってくれましたし、お蔭様で10人の孫

にもめぐまれました。あの時5人の子供をつれて主人のところに行っていたらこの孫たちにあえなかったと思うとご縁の有難さをしみじみ思わずにはいられないのです。14年前喜寿のお祝いに招かれたとき笑いながらこんな話をしてくださったのです。お寺にもよくお参りくださいました。私の記憶ではご主人の命日にお参りを欠かしたことは一度もございませんでした。

私は方丈様の追っかけをさせていただきますと冗談を言いながら私のお寺での行事のときは勿論、地元や県外で行う私の説教や講演にはどこで聞かれたのか時々顔を出されておられました。

6年前、その清水さんのお寺へのお参りがしばらく途切れしました。東京にいる娘さん夫婦のところにも行っておられるのだと思っておりましたら2・3ヶ月してちょっぴりやせられた清水さんのお寺に参られたのです。

方丈様、しばらく病院に入院をしておりましたがやっと退院させていただきました。ガンだそうです。余命は長くて後2年、手の施しようがないと言われてまいりました。二人の間にしばらく沈黙が続きました。その沈黙を破って私は彼女にこう尋ねたのです。私に出来ることって何かありますか？

彼女はにっこり笑い、頷きながらこう答えたのです。これまでもおり方丈様の追っかけをしてよろしいですか？ 勿論いいですよ。それともう一つ、私がもうだめだと感じたとき、長男に連絡をさせますので方丈様、私の最後を見届けていただけないでしょうか？ これにも大きく頷いて二人は別れました。それからは以前と変わらぬご様子で清水さんのお寺のお参りは続きました。ひょっとしたら医者の診たては誤診だったのでは？と思うほどお元気になられたのです。相変わらず追っかけもしてくださいましたがご家族の方が必ず付き添ってこられるようになったのが気がかりでした。4年前の1月、私は千葉県でお話をさせていただいておりましたがそこにお寺から電話が入ったのです。清水さんがお会いしたいそうです。私はその晩予定されていた私の歓迎晩餐会を途中でご無礼し最終便の飛行機で地元に戻りすぐさま病院に駆けつけました。痩せ衰えた清水さんが私を待っていてくれました。手を握り足をさすって差し上げましたが足の先はもう冷たくなりかけておりました。痛いかい？と訊ねましたら小さく頷きました。痛いはずで体中にガンが転移していたのですから。何か言いたいことは？私のその問いかけに彼女は頷きました。方丈様、死んだら主人に会えるのでしょうか？ どうしても逢いたいのです。会えるようにしていただけないでしょうか。分かった、私はそう答えました。もう一つございます、実は私の次男の嫁は永年リュウマチで苦しんでまいりました。その嫁の痛みを、私が代わりに背負っていけないでしょうか。体中をガンに蝕まれ痛みを耐えている87歳の老人があらたに他人である嫁の痛みさえ背負っていかうというのです。出来ますよ、もちろん出来ますとも。方便としりつつも私はそう答えずにはいられませんでした。

すると最後に清水さんは私の顔をみつめながらこう言われたのです。方丈様最後の息はどうついたらよろしいのでしょうか？ 思っても見なかった質問でした。でも戸惑いは許されませんでした。なぜなら命がけの問いかけだったからです。私は清水さんの手をあらためて握り締めこう言ったのです。サーゆっくりと全ての息を吐いて御覧なさい。吐けないとこまで言ったら今度はゆっくりすって御覧なさい。サーもう一回、ゆっくりはいて、ゆっくりすって。ゆっくりはいて、ゆっくりすって。清水さん、私は貴女の願いが叶う様に般若心経をお読みするから貴女はこのままの息を続けてちょうだい。私は彼女のために般若心経を読み始めました。清水さんもまた私の言ったとおりの呼吸を続けてくれました。ゆっくり吐いて、ゆっくりすって。ゆっくりはいて、ゆっくり吸って・・・何度続いたことでしょうか。ゆっくり吸いながら静かに事切れたのです。私は清水さんの手を握り締めておりました。両の目じりからたまりにたまった涙が溢れ出て参りました。でもその涙は少なくとも悲しみの涙ではないと信じました。なぜなら涙で潤んだ私の目から見ても余りにも穏やかで安らかな顔で永久の眠りにつかれていたからであります。死ぬる直前まで見事にその時、その刹那を生き切った人生の達人者であられました。

ロータリーで言う私の職業奉仕とは、儀式の司祭者として霊の鎮魂に徹するだけでなく、残された生きておられるお方に生きる知恵と勇気をわが身で示すスピルチャルリーダーになるようにと彼女は身をもって私に教えてくださったものと受け止めさせていただいております。

最後にもう一つポール・ハリスの職業奉仕に関するであろう名言をご紹介します。

一般的に見て、ロータリアンは自分が携わる職業こそ社会に奉仕する最も手近な道であると心得ている。当然のことで職業にかけては専門家だが、慈善事業にはまったくの未熟者だからである。職業こそ自分にとって最も身近なものなのです。職業人がカムチャッカ半島や南洋諸島を調査して住みよい世界を作るために一役買おうなどと務める必要などまったく無い。

そんなことをするより、社員の心に赤々と灯を点じ、希望と活力を如何にしてかき立てるか、その方策を徹底的に探求するほうが常識的なより良い奉仕の道である。

ロータリーはわれわれに偉くなることなど一切望みません。ただ立派な経営者や専門職務者になるこ

とは期待するのです。なぜならロータリーは誤魔化しがなくぶれない倫理観を保ち付加価値の高い自分の仕事を社会に提供し、終局的には世界の平和に貢献することを綱領にうたっている仲間の集まりだからであります。ポール・ハリスのこの言葉はロータリーの根幹を的確に言い表しているまさに金言であろうと思います。

私には尊敬申し上げているロータリアンが何人もいらっしゃいますが、心から信頼申し上げお慕いしているロータリアンがお二人いらっしゃいます。

お一人は元RI会長ヴィチャイ・ラタクルさん、もうお一方が2640地区パストガバナー、財団の管理委員もお勤めいただいた中島治一郎先生であります。

ヴィチャイ元会長は今年86歳になられました。

今年の早春元会長は私どもの地区大会の会長代理をお勤めいただきました。大会終了後貴方の生まれ故郷をこの目で見たい、そう言われましたので2日間鶴岡にお泊りいただきました。兄弟分の足立先生にも無理を言って1日だけお付き合いいただきました。羽田までお見送りをいたしました。別れ際、私の手をとって元会長は静かにこう言われました。Fuji有難う、とっても楽しかった。私もそんなに長くはない、後は頼んだよ！！後は頼んだよ、それは職業奉仕だけは忘れないようにとのお言葉であったと受け止めさせていただいております。

一方中島先生は私より一回り上のイノシシ、今年77の喜寿を迎えました。

今年の初め、私もお蔭様で喜寿を迎えました。それを引き際に6月でクラブを退会することに決めました。クラブ理事会も何とか了承してくださいました。貴方にだけはお知らせしておきますが今しばらくはご内密に！というメールをいただきました。私を残してロータリーを離れられるのですか？とすぐに返信いたしました。

すると先生からごめんなさい！約束をたがえて。でも貴方はまだ若い。私は歳をとりすぎたのです。今のロータリーをそしてこれから間違いなく歩むであろう私の夢と相容れないこの組織の将来を見届ける勇気がなくなったのです。というメールをいただいて納得いたしましたのです。

最近私は1911年 The National Rotarianの冒頭にポール・ハリスが書いた「私はロータリーからお互いの欠点を我慢しあう寛容の価値の何たるかを学び知ったという」一説をかみ締めているのであります。1951年に制定された現行の綱領から踏み外れた方向に行きかけているロータリーであります。私は出来る限り1ロータリアンとしてロータリーの行く末を見届けたいと思っております。なぜならこの組織があったから職業奉仕に出会いちょっぴりですが己を高めさせていただきましたし、なによりもヴィチャイ元会長に中島先生に足立先生にそして皆様にお会いできたからであります。その恩に報いることが私に与えられた責務であろうと思っております。

いただいたお時間がやっまいりました。

これをもって本日の私の話を閉じさせていただきます。

ご清聴に感謝申し上げます。